

## 南オーストラリア州アデレードにおけるベトナム系住民の分布とその特徴

筒井由起乃\*・松井圭介\*\*・堤 純\*\*・吉田道代\*\*\*・葉 倩瑋\*\*\*\*

\*追手門学院大学国際教養学部, \*\*筑波大学生命環境系,

\*\*\*和歌山大学観光学部, \*\*\*\*茨城大学人文学部

近年、オーストラリアではアジア化が進んでいる。なかでも多いのが、中国、インド、ベトナムである。中国やインドからの移民が2000年代以降に急増したのに対し、ベトナムからの移民は1970年代後半からのインドシナ難民を中核としており、在豪年数の長さや難民としての性格を持つ点が特徴的である。ベトナム系は特にニューサウスウェールズ州とヴィクトリア州に多いが、クイーンズランド州、南オーストラリア州にも1万人以上が居住している。シドニー郊外のカブラマッタに代表されるような「ベトナム人街」も形成されている。このようなベトナム社会の形成過程とその実態を解明するのが本稿の目的である。本稿では、来豪時期によって社会経済的な背景が異なることに着目し、属性の違いが移民の職業選択や居住地選択といった意思決定や生活形態にどのような影響をおよぼしているのかについて、南オーストラリア州アデレードを対象として検討する。

キーワード：ベトナム系住民、分布、ライフヒストリー、アデレード

### I はじめに

近年、オーストラリアではアジア化が進んでいる。2011年のセンサスによると、アジア系移民は全人口の8.7%におよんだ。外国生まれ人口では約3割を占め、中国(31.9万人<sup>1)</sup>、イギリス、ニュージーランドについて3位)、インド(29.5万人、4位)、ベトナム(18.5万人、6位)、フィリピン(17.1万人、7位)の4か国が10位以内に入った。

これらアジア系移民の増加は2000年代以降で顕著であり、2001年のセンサスと比較すると、中国系は2.2倍、インド系は3.1倍に急増している。つまりアジア系は全体としてみれば比較的新しい移民であるといえる。実際にオーストラリアでの平均滞在年数も、中国系で8年、インド系で5年と短い。

ところがアジア系のなかでもベトナム系は様子が異なる。2000年代の増加は20%にとどまる一方で、滞在年数は22年と長い。ベトナム系の移

民(難民を含む)の推移をみると(図1)、増加のピークはベトナム難民<sup>2)</sup>が発生した1970年代後半から1990年代初めにかけてであることが示される。また2001年のセンサスでは、外国生まれ人口の4位に入っており、アジア系移民の主流をなしていたこともわかる。

ベトナム系の人口を州別にみると、最も多いのはニューサウスウェールズ州で7.2万人(うちシドニーに6.9万人、外国生まれ人口では、イギリス、中国、インド、ニュージーランドについて5位)、ついで多いのがヴィクトリア州で、6.8万人(うちメルボルンに6.7万人、同4位)である(図2)。この2州に全体のおよそ4分の3が集中していることになる。一方で、クイーンズランド州、西オーストラリア州、南オーストラリア州にもそれぞれ1~2万人のベトナム系住民が居住している。ベトナム系住民が多いシドニーやメルボルンには、「ベトナム人街」も形成されており、代表的なシドニー郊外のカブラマッタでは、ベトナム系が住民のおよそ3分の1を占めている。

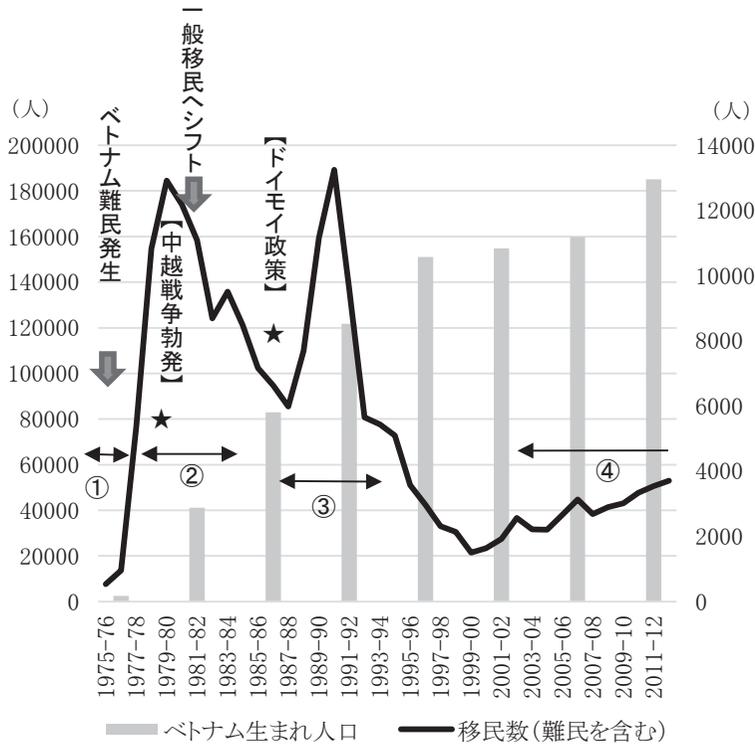


図1 ベトナム系の人口動態と移民数の推移  
 (ABS Community Profile 2001, 2011, Settler arrivals 1995-96, Settler arrivals 2005-06, Immigration Upgrade 1999-00, James E. Coughlan et.al. ed. 1997:276により作成)

1991年から2011年までのセンサスデータをもとに、各州のベトナム系住民の動態もみてみよう(図2)。州によって違いはあるが、ピークの最後にあたる1990年代前半だけでなく、2000年代後半にも増加していることがわかる。

この20～30年の違いは大きい。移民の送り出し側であるベトナムが、旧南ベトナムの社会主義化や、市場経済への移行(ドイモイ政策の導入)など、大きく転換したのだから、なおさらである。つまり同じベトナム系であっても、来豪時期によって、社会経済的な背景は大きく異なるのである。このような属性の違いは移民の職業選択や居住地選択といった意思決定や生活形態にどのような影響をおよぼしているのだろうか。本稿では、この点について、南オーストラリア州の州都

であるアデレードを対象として検討する。

アデレードのベトナム系人口は1.2万人で、シドニーやメルボルンと比べると少ないものの、外国生まれ人口では5位につけている。またアデレードの北・西部およびその近郊(Port Adelaide-Enfield-The Parks)は全国的にみても、ベトナム系が集中する地域であるとされる(Coughlan, 2008)<sup>3)</sup>。

本研究では、センサスをはじめとした統計データを分析して全体的な特徴を把握するとともに、ベトナム系住民に聞き取り調査を行ってその実態にせまろうとしている。当事者であるベトナム系住民の視点に立とうとするアプローチは、在日ベトナム系住民を研究した川上(2001)や、アメリカのベトナム系住民を研究した古屋(2009)に近

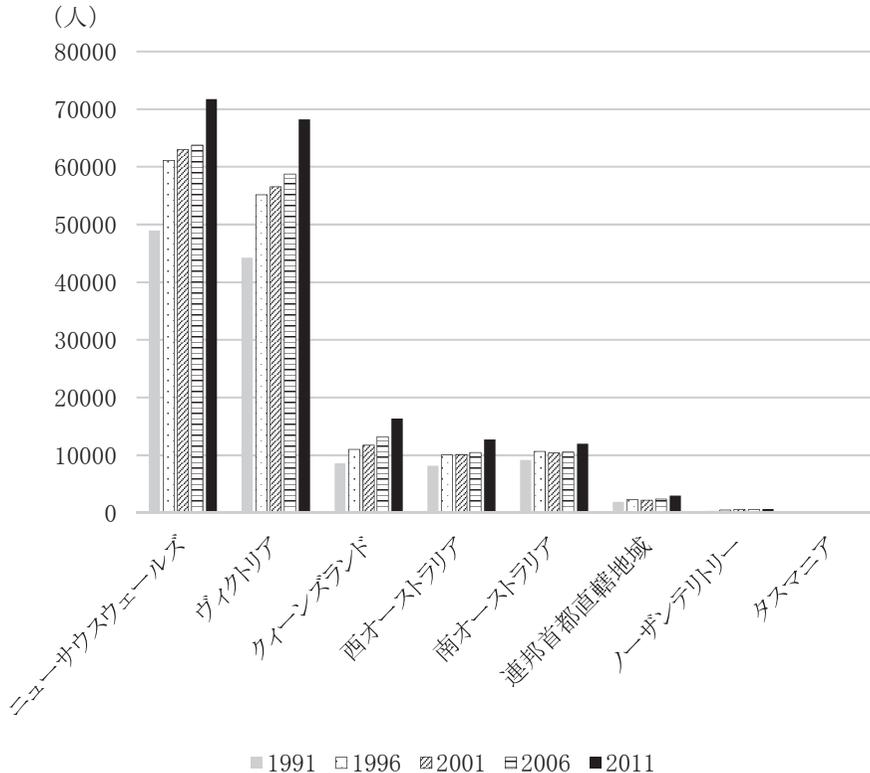


図2 州別ベトナム生まれ人口の推移  
(ABS Census of Population and Housing, 2001および2011により作成)

いといえる。

アデレードにおける聞き取り調査は2012年と2015年の2回行った。ベトナム語と英語を併用したが、英語をほとんど話せない住民も多く、結果として9割がほぼベトナム語に拠ることとなった<sup>4)</sup>。

## II オーストラリアにおけるベトナム系住民の特徴

### 1. 東南アジア系住民との違い

上述したようにベトナム系住民には元難民が多く、ほかの移民グループと比べて、つぎのような違いが認められる。まず、長期にわたって戦時下や難民キャンプでの生活を余儀なくされ、物的、心的に剥奪状況のなかにいたため、英語力が低いあるいは獲得能力が低下している傾向がある。このため、教育・技術レベルを十分にあげることが

困難で、収入面でも不利な場合が多い。実際にベトナム系の就業先をみると、ほかの東南アジア系と比べても、製造業従事者、非専門職労働者の比率が高かった(関根1989:380-382)。またそうした不利な状況にあるためか、最近においてもベトナム系は都市部に居住する割合がきわめて高く、全体の96.8%が主要都市に集中している。

### 2. ベトナム系住民の分類

オーストラリアのベトナム生まれ人口は1975年以前にはおよそ700人にすぎなかったが、1981年には5万人、1991年には12.2万人、2001年には15.5万人と増加した(図1)。2006年は16万人で微増にとどまったが、2011年には18.5万人(外国生まれ人口の3.5%)と再び増加に転じた。家

庭でベトナム語を話す人口も、23.3万人（全体の1.1%）と2006年の19.5万人から増加している。ベトナム系の移民が、難民やその家族を核としつつ、その子孫であるオーストラリア生まれの2世や3世、さらには新規の移民にも拡大していることがわかる。

具体的には以下のように分類できよう。なお、

①～④の番号は、図1中の番号と対応している。

①1975～77年の難民：

旧南ベトナム政府関係者および中流階級が多く、高等教育を受けている人の比率が高い。一度職業上の下降移動を経験しても、努力によって再度、社会的上昇移動する割合が、後の難民に比べて高い（関根、1989：382-385）。

②1978年以降の難民：

小ビジネス経営者や農民などが多く、経済難民とも位置付けられる。教育技術レベルが相対的に低く、職業選択が比較的困難である。1978年に中国とベトナムの関係が悪化したこともあり、中国系ベトナム人が多いという特徴もある。

③1990年代以降の移民：

家族呼び寄せによる移民の場合は、「労働者」

というより「扶養者」のケースが多い。英語をほとんど話せない人も多い。

④2000代後半以降の新規移民・留学生：

留学を契機とした若年層が多く、英語がある程度堪能。

⑤オーストラリア生まれの2世、3世：

ベトナム語が不得意な人もいる。

### Ⅲ アデレードにおけるベトナム系住民の特徴と居住分布

#### 1. 人口動態

Department of Government of South Australia, Multicultural SA (2014) によると、アデレードには、1975年から1979年の間におよそ2,000人のベトナム人難民がやってきたが、一般移民へ移行した1982年からは、家族呼び寄せ（Family reunion Basis）による家族移民が増加していった。2011年現在で、人口全体に占めるベトナム系の割合は0.8%であり、30～50代が多いという特徴がみられる。

図3は、1991年から2011年間のアデレードにおけるベトナム生まれ人口の推移を示している。

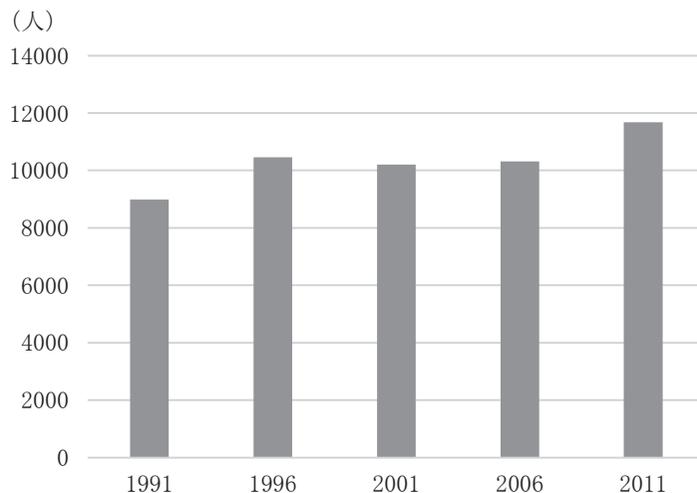


図3 アデレードにおけるベトナム系住民の推移  
(ABS Census of Population and Housing, 2001および2011により作成)

アデレードにおいても1990年代前半と2000年代後半にベトナム系が増加していることがわかる。1990年代前半に家族呼び寄せによる移民（上述の③）が増えたこと、2000年代後半に留学生など（上述の④）が増えたことが示唆される。2012年の留学生数は1,177人で、同年に新たに540人が加わっている。

Coughlan, J. E. and McNamara, D. J. (1997 : 66-68) によると、1994-95年度にオーストラリアに到着したベトナム人移民のうち、無職、商人と回答した人がそれぞれ34%を占めた。この値はアジア平均の13.3%と14.8%と比べても高い。ベトナムでは女性が副業的に小商いに従事するケースが多いことから、この時期の移民の多くが家族呼び寄せによることが推察できる。

また、2001年と2011年で比較すると、ベトナム生まれ人口が10,207人から11,682人と微増であるのに対して、家庭でベトナム語を話す人口が12,374人から15,620人に増加しており、祖先はベトナム人であると回答した人も15,777人にのぼる（2011年）。つまり、アデレードにおいてはオーストラリア生まれの2世、3世（上述の⑤）も増えていることがわかる。

## 2. 居住地の分布

こうした属性の違いは彼らの意思決定や行動にどのような影響をおよぼすのであろうか。居住地の選択から検討してみよう。図4はベトナム系住民の分布を、2011年のセンサスに基づき、「家でベトナム語を話す」人口をSA2統計区<sup>5)</sup>のレベルで集計し、さらに、来豪時期（2000年前／後）の情報をクロスさせて集計したデータを地図化したものである。

家でベトナム語を話す人々の最大の集積を示す地区は、CBDの北西に位置するThe Parks地区であり、1,657人を数える。当該地区の全人口

に占めるベトナム系住民の割合は12.7%に達している。さらに、The Parks地区の西に隣接するWoodville - Cheltenham地区では家庭でのベトナム系住民は833人（同地区の6.8%）、The Parks地区の北東側に位置するPooraka地区では664人（同地区の4.4%）、Enfield - Blair Athol地区で472人（同地区の2.6%）などを含め、アデレードのCBDの北西から北東にかけての一帯にベトナム系住民の大きな集積が確認できる。来豪年を2000年で区切って集計した結果と居住地の対応を見てみると、CBD北側のベトナム系住民の集積地区では、ほぼ殆どの地区において、1999年以前の来豪者が地区全体のベトナム系住民の80～90%程度を占めて大多数となっている。これは、前章で挙げた①～③のベトナム系移民に相当する。一方、主にCBDの南部では、家でベトナム語を話す人口自体が北部に比べて圧倒的に少ない上、来豪年も2000年以降の割合が北部よりも高い傾向がみとれる。

## 3. 居住地選択の背景

なぜこのような居住地選択がなされたのであろうか。その背景を探ってみよう。

### 1) 北・西部

アデレードの北・西部は工場が多く立地しており、地価が比較的安い地域である。また、元難民がアデレードでの生活をスタートさせたベニントン移民収容施設（ベニントンホテル、Pennington Migrant Hostel）もこの付近にあった<sup>6)</sup>。こうした条件が居住地選択に影響を与えたと考えられる。

1980年代以降、ベトナム系の商店が増え、ベトナム人会の事務所やベトナム系仏教寺院、ベトナム系カトリック教会などができたことで、さらに「住みやすさ」が増した（図5）。現在では、ベトナム系のスーパーマーケットやショッピング

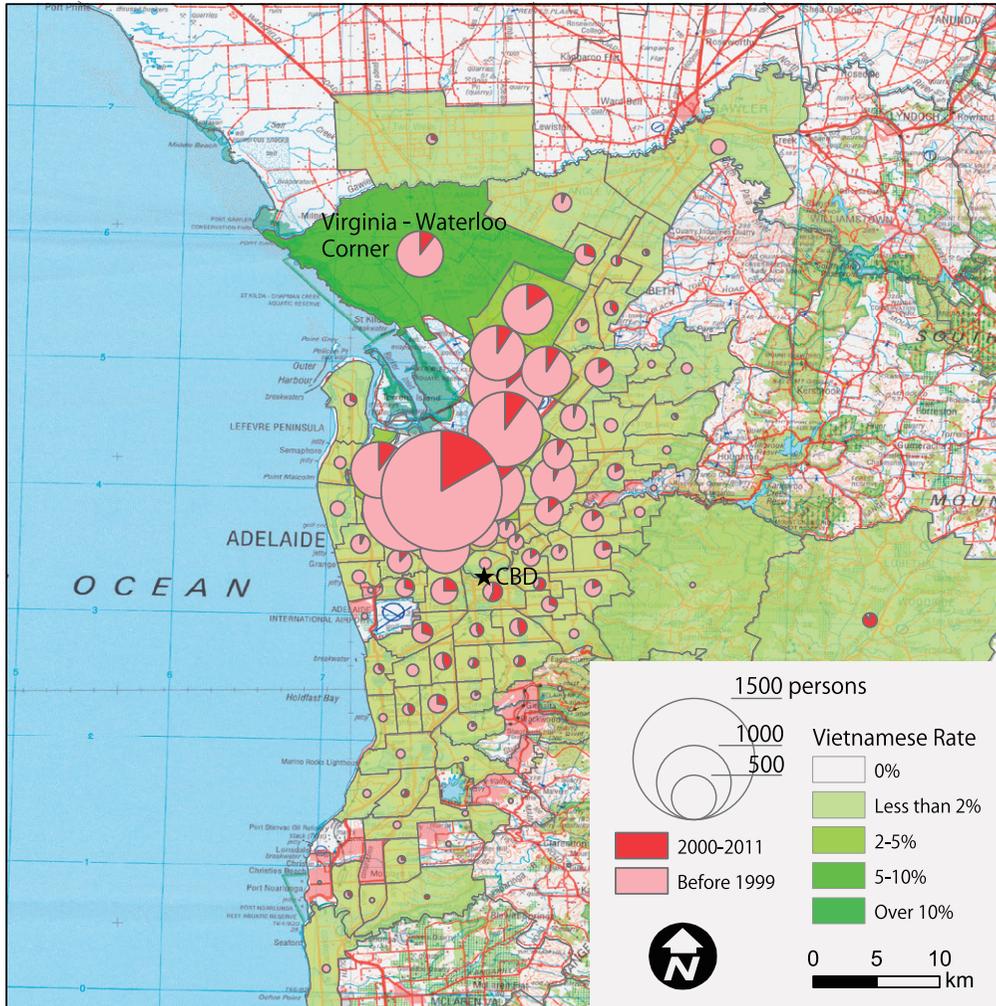


図4 アデレードにおけるベトナム系住民の分布

(ABSのカスタマイズデータにより作成)

モール、病院、法律事務所、新聞社、郵便局、ガソリンスタンドなどがあり、ベトナム語だけで生活することも可能である。

ベトナム人会の事務所はAtholにあり、敷地内には、コミュニティホールも併設されている(2013年に完成)。ホールでは集会や結婚パーティが開かれるほか、老人会の親睦会も毎週行われている。事務所の正門はベトナム社会のシンボルである「村門」を模したものであり、コミュニティ

の紐帯がみとれる(図5-a)。

アデレードのベトナム系住民の53.7%は仏教徒で、キリスト教徒も(うち88.7%はカトリック)が28.6%を占めている。ベトナム系仏教寺院は、かつてのペイントンホテルから数十メートルの近さにあり、近隣の住宅地にはベトナム系住民が多く居住している。寺院の内部には納骨堂もあり、祖国への帰国を果たせない多くの遺骨が安置されている。



a) ベトナム人会の正門

b) ベトナム系仏教寺院  
敷地内にベトナム補習校もある。c) ベトナム系カトリック教会のマリア像  
ベトナムの民族衣装であるアオザイをまとっている。d) ベトナム語が併記されたATM  
ベトナム系の店舗が多いショッピングセンターではベトナム語だけでも事足りる。

図5 アデレード北・西部のベトナム系施設

(2015年2月 筒井撮影)

一方、ベトナム系カトリック教会はThe ParksやEnfield/ Blair Atholからはやや離れたPoorakaに1980年代に建てられた。政府が安価で払下げてくれた敷地には、礼拝に訪れる信者のために広い駐車場も作られている<sup>7)</sup>。最近では教会の近隣に転居する人が増え、Poorakaのベトナム系の人口比率が上昇している。2011年のセンサスでは

4.4%となっている。

寺院や教会はベトナム系住民の文化的、精神的なよりどころといえる。いずれも僧侶やシスターがおり、信者が定期的に訪れている。また子ども達に対するベトナム語学習の場にもなっており、週末に補習クラスが開かれている<sup>8)</sup>。

## 2) ヴァージニア

北部の農村地域・ヴァージニアでは、園芸農業がさかんであり、1980年代からベトナム系が農業労働者として働いていた。1990年代までは地価が比較的安かったことに加え、ヨーロッパ系の農場主が後継者不足を抱えていたこともあって、ベトナム系の農場が増加した。現在ではおよそ600を数える。農業労働者を加えたとこの地区のベトナム系は1,000世帯にもなり、その住民比率は9.4%と、The Parksについて高い。

一帯には農業ハウスが立ち並び（図6）、なかには全国展開するスーパーマーケットと契約栽培をしている農家もあるなど、全体として経営は好調である。

## 3) 南部

南部には北・西部やヴァージニアのようなベトナム系住民の比率が高い地区はみられない。したがって南部に居住するのは、ベトナム社会への心理的、物質的依存の少ない人たちであることが示唆される。実際に、南部では北・西部やヴァージニアと比べると、2000年以降の新しい移民の割合が高くなっている。オーストラリア社会で成功した人、ベトナム系以外と結婚した人、留学生などが想定される。

以上のような背景をふまえたうえで、以下、15名の代表的なライフストーリーを示し、個々の属性の違いと居住地選択の関係を検討したい。

## IV アデレードにおけるベトナム系住民のライフストーリー

### 1. 1975～1977年の難民

#### 1) 事例A：著名な医師

サイゴン陥落後、一時アメリカに逃れたが、旧知の知人を頼り1975年6月にアデレードへ来た。オーストラリアではベトナムの医師免許が認められなかったため、再試験を受けなければならな

かったが、業績を認められて特例として免除された。医師として勤務するかたわら、ベトナム人のネットワーク作りにも尽力した（Vietnamese Community in Australia SA Chapter INC, 2005: 5-6）。

#### 2) 事例B：南オーストラリア州知事

2014年9月にアジア系で初めて南オーストラリア州の知事に就任したLe Van Hieu氏は、1954年、ベトナム中部生まれ。ダラット大学卒。1977年に妻とともにボートピープルとなり、マレーシアを経由して、ダーウィンに漂着。アデレードのペンントンホテルで3カ月過ごした後、アデレード大学で学び直して経済・会計の学士を取得、2001年には修士号を取得した。1991年から2009年までオーストラリア安全投資委員（Australian Securities and Investments Commission）を務めた。また1995年から2014年まで南オーストラリア多文化民族問題委員（SA Multicultural and Ethnic Affairs Commission）も務め、2001年に副議長、2007年にはアジア系で初めて議長に指名された。2007年には、在外ベトナム系では世界で初めて副知事に就任した（Vietnamese Community in Australia SA Chapter INC, 2005: 11-13）<sup>9)</sup>。

#### 3) 事例C：漁師からレストラン経営へ

1957年、ベトナム中部のクアンガイ省生まれ。1977年に船で脱出し、マレーシア経由でメルボルンへ。トヨタの工場で6～7年間働いた後、アデレードに来た。1987年にレストラン開業。1993年にサイゴン在住の妻と見合結婚し、現在は18歳、13歳、10歳の3児の父。14年前にローンで住宅を購入したが、すでに完済。別にもう1軒所有している。ベトナムには父親と兄弟がおり、数年に1回のペースで帰国している。

## 2. 1978年以降の難民

### 1) 事例D：高校教員から小学校教員へ<sup>10)</sup>

1944年、メコンデルタのドンタップ省サデック<sup>11)</sup>生まれ。サイゴン師範大学卒。サデックの女子高で英語教師となり、校長も務めた。1978年に退職。父を亡くし母一人子一人であったが、母の強い勧めで1979年に脱出した。タイの難民キャンプに6カ月いた後、アデレードへ来た。しばらくは家具工場で働いたが、1982年に南オーストラリア大学で1年間学び、オーストラリアの英語教師の資格を取得した。1983年から2009年まで、キリスト教系の小学校で英語を教えた。同年代で同じように専門職で働いていた女性は、アデレードで10人ほどしかいない。未婚で、ベトナム仏教寺院からほど近くに家を購入し1人で暮らしている。

### 2) 事例E：弁護士から経営者へ

1949年ハノイ生まれで、南北分断後の1954年に、家族とともに南へ逃れた。1972年サイゴン法科大学卒。1974年に弁護士事務所を開設したが、1978年にボートピープルとなり、約1カ月後にダーウィンに漂着した。パースで1年間英語を勉強した後、メルボルンへ移り、製鉄工場で1年働いた。1980年に兄（インドネシア、中国経由で渡り、サンホゼのIBM工場に勤務）を頼って渡米したが、2年後に、親族を頼ってアデレードへ来た。ここで、サイゴン出身で元医師の妻と結婚した。夫妻とも言葉の問題もあって専門職の道はあきらめ、商売をはじめた。生命保険のセールス、医療品販売、不動産デベロッパー、パン製造などをしてきた。パン製造が成功し（最盛期には支店を4カ所もち、従業員を25人雇用していた）、12年前に郊外に豪邸を構えた。子どもは3人で、1984年生まれの長男と1987年生まれの長女はいずれも会計士。子どもたちは英語の方が流暢で、とくに1991年生まれの二男はベトナム語が不得

意である。

### 3) 事例F：農民から料理人へ

1967年、サイゴン郊外の農村に生まれた。1978年に単身で脱出し、シンガポール経由でアデレードに来た。工場勤めの後、1986年からレストランで働くようになった。妻はパート勤めで、家賃月700ドルのアパートに住む。長男は20歳、長女は14歳である。

### 4) 事例G：ジャーナリスト

1951年、サイゴン生まれ。文芸誌を発行していたが、1980年に脱出した。アデレードでは工場勤めの後、ビデオ屋を営んだが見込みがないのでやめ、1995年に週刊誌を創刊した。発行部数は3,000部で社員は3人。

### 5) 事例H：高校生から「世帯主」へ

1963年、ホーチミン市に近い南部のヴァンタウ生まれ。北部のナムディン省が故郷で元知識人階級の出身。父の方針で15歳まで寄宿学校で学んだ。1979年に父と上の兄2人が死亡、13歳と10歳の弟を連れて脱出した。3日間漂流し、シンガポール経由で、1981年にアデレードのペニンントンホテルに着いた。異国での兄弟3人の生活は不安でたまらなかったが、親切なオーストラリア人に助けられた。ホテルの英語教師はオーストラリアでの生活や仕事の探し方などいろいろと教えてくれた。弟たちのために学業を諦め、1日16時間、仕事を二つ掛け持ちして1日も休むことなく働いた。1986年には自動車を購入し、結婚もした。翌年に男児が誕生し、1989年には70,000ドルで家を購入した。1991年に女兒が生まれた時には住宅ローンは完済していた。長男は理学療法士、長女は歯科医になり、生活は安定している。今でも毎日働いているが、長女が就職してから、日曜日は休むようになった。1991年に母（80歳）と2人の弟妹も呼び寄せた。

### 6) 事例I: 高校生から医療関係者へ

1972年、メコンデルタのソックチャン省出身。看護師の両親のもと、6人兄弟の末っ子として生まれた。1987年に兄弟4人で脱出。別に脱出した両親とインドネシアで再会し、アデレードへ来た。1996年から2年間医療を学び、現在は、パートタイムだが、社会事務所で働き、高齢者サービスを担当している。

2人の兄(1, 2子)は医者、上の姉は薬剤師と医療関係の専門職についている。次姉は商売をしており、すぐ上の兄は美容師である。両親は2008年まで豆腐屋を営んでいたが、2009年にブリスベンに移り、兄と暮らしている。

2001年に同じくメコンデルタのチャビン省出身の妻と結婚し、13歳、8歳、4歳の3男がいる。妻はコカ・コーラ社で安全関係の専門家として勤務している。

### 7) 事例J: ヴァージニアの成功者

1952年、メコンデルタのヴィンロン省生まれ。中国系の家系で、父親は肉屋を営むかわら、100haの地主でもあったが、サイゴン陥落後、農地を没収された。1970年に結婚し、4男1女(末子は1979年生まれ)に恵まれた。1982年初めに脱出し、インドネシア、タスマニア経由で1983年にアデレードへ来た。工場に勤めた後、商売を始めたがうまくいかず、1987年にヴァージニアへ移住した。1991年に農場(2ha)を購入しキュウリ、トマトを栽培している。この地区では水耕栽培の先駆けとして知られ、その技術を知り合いのベトナム系農民に教えている。農地の買い増し、設備投資にも積極的である(図6)。現在は2人の息子(3子、末子)にそれぞれ経営を任せている。たとえば末子の農場でも、ベトナム系、アフガニスタン系、ラオス系など18人を雇用するほど規模が大きい。また、長男はメルボルンでスーパーマーケットを経営、次男はブリスベンで歯科医、



図6 ヴァージニアの農業地帯  
(2015年2月 筒井撮影)

長女(4子)はブリスベンで放射線技師、と、子どもたちも安定した生活を送っている。

### 8) 事例K: 40代主婦

1945年、中部のフエ生まれ。8歳年上の夫との間に8子(長子は50歳で末子は38歳)を得た。1982年に一般移民として来豪した夫の呼び寄せで、1989年にアデレードに来た。英語は不得意である。

## 3. 1990年代以降の移民

### 1) 事例L: 高校教師から農民へ

1947年、ベトナム北部のハドン生まれ。地主の家系で1954年にサイゴンに逃れた。1973年にグラット大学を卒業し、高校で数学や物理を教えた。1989年末に脱出し、カンボジア、タイを経て1993年にオーストラリアへ来た。シドニーで学んだ後、様々な仕事をしたが失敗し、1999年末にアデレードへ移住。アデレードで結婚し、18歳と16歳の男子がいる。子どもはアデレード中心部の難関高校まで通学させている。2004年に農場を購入し、農業ハウス0.5haでトマトの水耕栽培を行っている。コストのかかる小規模経営は年々厳しくなっている。農地2haを買い足した



図7 農業ハウスの内部

- 1) 新式のハウスを2013年に建設し、200万豪ドル以上を投資した。
- 2) 現在3棟あるが、2016年にさらに建設する予定であるという。

(2015年2月 筒井撮影)

が、新たな投資は控えている。

## 2) 事例M：中学生から通訳へ

1981年、ホーチミン市<sup>12)</sup>生まれ。5人兄弟で上の2人は死亡、父親は行方不明。1994年に母、妹と脱出。カンボジアに6週間いた後タイにうつり、そこで難民指定をうけた。アデレードでは、語学学校に通った後に8年生に編入したが、英語に苦勞し落第した。専門学校へ進み、英語とITを学んだ。4～5年間働いたが、何をやっても自信を持ってなかった。2009年に翻訳や通訳の専門学校で1年間学んだ後、社会事務所で通訳として勤務している。週3日のパートタイムで、後の4日は2007年から入退院を繰り返す母親の看病をしている。

現在、母、妹と同居。妹は26歳だが、生活は不安定。姉はアメリカ在住で夫と2人の子がいる。現在では英語には不自由ないが、逆にベトナム語が不得意である。

## 3) 事例N：中学生からSEへ

1981年サイゴン生まれ。1982年に父が家族移民でクイーンズランドに行き、1994年に父の家族呼び寄せで母、妹とオーストラリアに来た。4

年生に数か月いた後8年生に進級。2001年に南オーストラリア大学へ進み、プログラミングを学んだ。卒業後から社会事務所に勤務。2007年に結婚し3歳の娘がいる。夫は鶏肉加工工場に勤務。母は社会主義政権下で交通警察官だった。

## 4. 2000年代後半以降の新規移民・留学生

Oさんは1977年、メコンデルタのカントー生まれ。カントー大の医学生であったが、3年で退学し渡豪。アデレード大で健康科学を学んだ後、南オーストラリア大学でソーシャルワークの修士号を取得。社会事務所で麻薬やアルコール、DVなどのプロジェクトマネージャーを務める。1999年末に8歳年上でチェコとマレーシアのハーフであるオーストラリア人の夫と結婚し、13歳の男の子と9歳の女の子がいる。家庭では英語を使用し、子どもたちはベトナム語をほとんど話せない。

## V まとめ

本稿では、来豪時期を考慮してベトナム系住民を五つに分類し、それぞれの属性を具体的に示すことで、ベトナム系住民の特徴をしようとしてきた。代表的な15名のライフヒストリーからは、つぎのような特徴が明らかになった。

初期の難民(①)には、元地主や知識人など、ベトナム本国において経済的にも社会的にも上層にいた人が相対的に多く、素養の高さが見受けられる。ベトナムの伝統的な価値観(儒教的)もみられ、その実践が経済的、社会的な再浮上につながったとも考えられる。また苦しい経験を共有したという連帯感や、それに基づいたエスニックコミュニティに対する奉仕精神もほかのグループと比べて強くみられた。1978年以降の難民(②)にもこのタイプが含まれているが(事例Hなど)、少数である。本国での出身階層は広く、経済的な

上昇志向の強い難民が多い。母親が社会主義政権下で交通警察官であったというNさんは、その典型的な事例といえよう。

難民たちのアデレードでの生活の出発点はベントン hostel であった。近くに工場が多くあり、英語が流暢でなくとも職を得やすく、家賃も比較的安かったため、hostel を出たベトナム系が周辺で暮らしはじめた。言葉や生活に慣れ、経済的にも余裕ができると、自分で商売をはじめた者が出てきた。また医師や教師などの専門職についていた人の中には、オーストラリアの免許へ書き換えをするために、学び直す者もいた。

1980年代から1990年代にかけてのアデレードは物価が安く、現在とくらべると、住宅価格は10分の1ほど、食料品や日用品は6分の1ほどであったという。意欲的なベトナム系にとっては、好機であったといえる。実際に、数年で商売を興したり、自動車や住宅を購入したりする人は少なくなかった。

一方で英語や技術を習得できず、仕事を見つけれない人々はこうした流れにのれずにいた。高齢者や健康を害した人、あるいは保護者のいない子どもなどはとりわけ不利であり、来豪時の年齢や学歴、職歴がその後の生活に大きく影響したことがわかる。事例Mはその代表的な例であろう。

多くの場合、家族のつながりは強く、子どもの将来をみすえて教育に熱心であった。1990年代以降に家族移民が増加したのも、医療関係や会計士といった専門職に就き、安定した生活を送る2世が多いのも、このためであると考えられる。その意味では、家族構成や両親の経歴といった家庭環境もその後の生活を左右するといえよう。

辛酸な経験をし、ゼロから再出発した人々にとって、同胞との結びつきが大切であることは想像に難くない。相互扶助的な活動が行われ、精神的なよりどころとして仏教寺院やカトリック教会

が建てられ、コミュニティが形成されていった。英語が不得意あるいは話せないベトナム系が、こうしたコミュニティを居住地として選択するのは当然であろう。

一方で、英語に不安が少なくベトナム系コミュニティでの生活に依存していない場合や、生活・学業のためなどほかに動機がある場合には、環境のよい住宅地や、勤務先・学校に近い便利な場所を選択するであろう。1980年代初めにヴァージニアにベトナム系が移住した背景にもそうした動機があると考えられる。

このように、ベトナム系住民の居住地選択には、個々が抱える背景が影響をおよぼしており、それらは来豪時期によって、ある程度共有されている。

#### [付記]

本稿は2012-2015年度科学研究費補助金「ネオ・リベリズムの進展とアジア化するオーストラリア社会に関する人文地理学的研究」、基盤研究(B)(海外学術)研究代表者 堤 純、課題番号24401036による成果の一部であり、本稿の骨子は、日本地理学会2015年春季学術大会(2015年3月28日:日本大学)において発表した。本研究をまとめるにあたり、南オーストラリアベトナム人会長のLoc夫妻をはじめ、調査に快くご協力くださった方々に心より感謝いたします。

#### 注

- 1) この数字は中国生まれ人口である。オーストラリアのセンサスでは、「出生地」、「家庭で使用する言語」などがあるが、ここでは特に断りのないかぎり、「出生地」によることとする。
- 2) 1975年4月のサイゴン陥落と旧南ベトナムの社会主義化を契機に、難民として周辺各国に逃れた人々をさす。
- 3) Coughlan (2008) では全国6位とされる。この地域のベトナム生まれ人口は13,586人。また、家庭でベトナム語を話す人口は18,503人で、全国で7番目に多い。本稿では、郊外のPort Adelaideを含んでいないため人口が少なくなっている。
- 4) ただし、本文中のデータは、特に断りのないかぎ

- り、この聞き取り調査によって得たものである。また年齢は2015年2月現在に統一した。
- 5) 2011年センサスの統計区SA2は、各地区に含まれる人口がおおむね10,000人程度になるように設定された統計区である。<http://www.abs.gov.au/ausstats/abs@.nsf/Latestproducts/88F6A0EDEB8879C0CA257801000C64D9> (2015年5月31日閲覧)
  - 6) 現在はその役目を終え、記念公園に整備されている。
  - 7) 信者はおよそ3,000人いる。駐車場不足を解消するため、2015年現在、新たに増設工事を進めている。
  - 8) 寺院の敷地内には専用の教室がある。教会では、隣接する公立小学校の教室を借りてベトナム語を教えている。またヴァージニア地区でも小規模なクラスが開かれている。
  - 9) 南オーストラリア政府の公式ホームページも参照。<http://www.governor.sa.gov.au/node/27> (2015年4月1日閲覧)
  - 10) 個人情報保護のため、ここでは実名は明らかにしない。
  - 11) フランスの作家ドゥラスの小説「L'amant (愛人)」の舞台となった町である。
  - 12) サイゴンは、1976年の南北統一時に「ホーチミン市」と改称された。このインフォーマントはサイゴンではなく、新体制後のホーチミン市という名称を用いていた。
- 文 献**
- 川上郁雄 (2001) : 『越境する家族－在日ベトナム系住民の生活世界』明石書店。
- 関根政美 (1989) : 『マルチカルチュラル・オーストラリア』成文堂。
- 古屋博子 (2009) : 『アメリカのベトナム人－祖国との絆とベトナム政府の政策転換－』明石書店。
- Coughlan, J. E. and McNamara, D. J. (1997) : *Asians in Australia: patterns of migration and settlement*. McMillan Education Australia.
- Coughlan, J. E. (2008) : *The Changing Spatial Distribution and Concentration of Australia's Chinese and Vietnamese Communities: An Analysis of 1986–2006 Australian Population Census Data*, *Journal of Population Research*, 25 (2), 161-182.
- Commonwealth of Australia (2006) : *Settler arrivals 1995-96 to 2005-06 Australia, states and territories, 1999-00*.
- Department of Government of South Australia, Multicultural SA (2014) : *A profile of Vietnam-born South Australians* (PDF). [http://www.multicultural.sa.gov.au/\\_\\_\\_data/assets/pdf\\_file/0012/22053/Vietnam-Dec-2014.pdf#search='A+profile+of+Vietnamborn+South+Australians'](http://www.multicultural.sa.gov.au/___data/assets/pdf_file/0012/22053/Vietnam-Dec-2014.pdf#search='A+profile+of+Vietnamborn+South+Australians') [Cited 2015/2/1].
- Immigration and Multicultural Affairs (2001) : *Immigration Federation to Century's End 1901-2000* (PDF). <http://www.immi.gov.au/media/publications/statistics/federation/federation.pdf> [Cited 2015/4/1].
- Thomas, M. (1997) : *The Vietnamese in Australia*. in James E. C. and McNamara D. J. eds. *Asian in Australia: Patterns of Migration and Settlement*, 274-295.
- Vietnamese Community in Australia SA Chapter INC (2005) : *Đất mới: Đặc san mừng năm định cư của Người Việt tại Nam Úc (New Land: celebrating 30 years of settlement for Vietnamese Community in South Australia)* (ベトナム語、一部英語)。